THE HIDDEN DIMENSION

EDWARD T. HALL

かくれた次元

エドワード・ホール

日高敏隆
佐藤信行 訳

みすず書房

訳者略歴

日高敏隆　（ひだか・としたか）

1930年東京に生れる．東京大学理学部動物学科卒業．現在　東京農工大学教授（生物学）．著書「動物にとって社会とはなにか」訳書ローレンツ『ソロモンの指環』「攻撃」(共訳) モリス「裸のサル」ティンベルヘン「動物のことば」(共訳) ケストラー「機械の中の幽霊」(共訳) ほか．

佐藤信行　（さとう・のぶゆき）

1929年東京に生れる．東京大学大学院社会学研究科博士課程修了．現在　国際基督教大学助教授（文化人類学）．著書「未開と文明の交点」．

かくれた次元
© 1970 Misuzu Shobo

1970年10月30日　第1刷発行
1971年5月30日　第4刷発行

¥ 900.

訳　者　日高敏隆
佐藤信行

東京都文京区本郷3丁目17-15
発行者　北野民夫

東京都新宿区改代町24
印刷者　田中昭三

発行所　東京都文京区本郷3丁目17 郵便番号 113　株式会社　みすず書房
電話 814-0131(代)
振替東京 195132

理想社印刷・鈴木製本

日本版への序

私は小さな子供だったころから、日本の人々と日本の文化に親しい感じを抱いていました。何回かの日本訪問はいつもあまりに短期間にすぎたとはいえ、私は日本の人々に多大な好意と大きな共感を見出しています。

一研究者、一科学者として、私はおのおのの文化をそのまゆの中に、春がくればまゆからでてくるチョウかガのように包みこんでいる人間関係の複雑な網目を解きほぐすことに努力してきました。ある文化のもつ真の意味は、事情を知らない外国人の眼にはかくされています。したがって私の本は他の文化についての解説ではありませんし、けっしてありえません。そうではなくてこれは　他の人々の文化の中にひたって私が見出した私自身についての本なのです。このような本から得るところのものは、自分自身と自分のもつ文化についてであり、ことに、生命活動によってかくれがから解き放たれるまでは、まゆの中にひそむカや真珠貝の中に秘められた真珠のように、見た目にはかくれているものを、いかにして見出すかということなのです。

このような本は、生活を検討し、あらゆる人々がめいめい自分の織物を織りだしてゆく、生活の美しくも、すばらしい、そして多様な形を見出してゆく一つの途を示すものなのです。私は人類の運命に多大の関心をもっています。というのは、人間はあまりにしばしば表面しか見ておらず、自分自身について知ることがあまりにすく

ないからです。私が何か得るとすれば、それは人々が自分自身について何を知り得るかということであり、この本が日本語に訳されることをたいへんうれしく思っている次第です。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

まえがき

一般的にいえば、まじめな読者にとっておもしろい本に二つのタイプがある。特定の知識の体系を伝達すべく構成され、方向づけられた内容のものと、構造すなわち事象がどのようにオーガナイズされているかを扱ったものとである。ある本の著者が自分が今どちらのタイプの本を書いているかをコントロールしているかどうかは疑わしいけれど、彼がこの二つのタイプのちがいを意識していることは望ましいことである。同じことは読者についてもあてはまる。読者の満足は彼の口にはだされない期待に大きく左右されているからである。われわれがみな、多くの情報源からのデータに圧倒されている今日の世界では、人々がなぜ自分の専門とする分野においてすら発展に追いついていけないと感じがちなのか、容易に理解することができる。だれでも感じているように、世界ぜんたいとのかかわりが失われているという意識も、しだいに強くなりつつある。このかかわりの喪失の結果、照合の枠組をオーガナイズして、人間が対応してゆかねばならぬ大量の、しかも急速に変化する情報を統合してゆきやすくする必要が、ますます増しつつある。この『かくれた次元』という本は、まさにこれを提供することを目指している。

このタイプの本は、どの専門分野の系列にも属さないので、特定の読者層や分野のために書かれたものではな

い。専門分野向きでないということは、ぴったりとした答えを求めている読者や、すべてが内容や専門の点からきちんと分類されていてほしいと思っている読者には、失望を味わわせることになるかもしれない。

私は人類学者なので、人間行動のある面について、その端緒に立ちかえり、その発端となった生物学的な亜構造（サブストラクチュア）を探りだしてみるくせがついている。このアプローチは、人間も他の動物界のメンバーと同じように、最初も最後も、そしていつも、自分が一個の生物であるという事実の囚人であるということを強調する。人間を他の動物から切離す裂目は、多くの人々が思っているほど大きくはない。われわれが動物について、そして進化が生みだしてきた複雑な適応のしくみについて多くを知るにつれて、そのような研究はもっと難解な人間の問題の解決にとって、ますます深い関連をもつようになってくるのである。

私の二つの著書『沈黙のことば』とこの本はどちらも、体験の構造が文化によって型どられる問題を扱っている。つまりそれは、ある文化に属するメンバーが共有し、知らず知らずに伝えあう、そして同時に他のすべてのものごとを判断する背景をなしているあの深い、共通の、口に出してはいわれない体験の問題なのである。多くのレベルにわたるコミュニケーションの膨大な複合体である文化という次元に関する知識は、もしそれが次の二つのことのためでなかったら、事実上不必要なものであろう。その一つは、われわれが世界中どこにおいてもますます人々にインヴォルヴされてゆくということであり、もう一つは、農村の人々が都市に流れこんでくるにつれて、アメリカというわれわれ自身の国の内部で、多くの亜文化（サブカルチュア）が混じりあってゆくということである。

異なる文化システムの間にあつれきが生じるのは、国際関係だけに限られたことではない。このことは、今日ますます明らかになりつつある。そのようなあつれきはわれわれ自身の国の内部でも大きな比率を占め、都会の人口過剰によってますます激化してきている。なぜならば、一般の信念とは反対に、アメリカを作りあげている

多くの異なった集団は、それぞれの独自性を驚くほど強固に維持していくことがわかってきたからである。表面的には、これらの集団はみな似たようにみえ、似たようにきこえるかもしれない。けれどその表面の下には、時間、空間、物質、関係を構造化する際の、多様な、表面に現われず、形式にも現われない差違が横たわっている。このことがわれわれの人生に意味を与えるのではあるけれども、それは同時に、文化の異なる人々が作用しあうとき、善意の意図にもかかわらず、意味にゆがみを生じる原因となることがしばしばなのである。

人間が自分自身と友人との間に保っている空間、自分の家庭やオフィスで自分のまわりにきづいている空間――このような空間を人間がどのように利用しているかについての私の研究を述べてゆく目的は、当然のことと思われている多くのことを意識のもとにもたらすことである。それによって、自己の意識を増し、体験を強め、疎外を減らすことができるのではなかろうか。ひとことでいえば、自己を知る道に小さな一歩を進めて、人間に人間を紹介しなおす一助としたいのである。

多数の人々の積極的な協力と参加なしには、一冊の本といえども出版には至らない。それらの人々すべてが不可欠だったのに、表紙のカバーに記されるのは著者の名前だけである。けれどこの最終的な産物は一つのチームの共同の努力の賜物であることを、著者はよく知っている。チームのメンバーの中には、その役割がとくにはっきりしていて、その助けがなかったら原稿が出版社の手にわたらなかったであろう人々が、いつも何人かいる。私がとくに謝辞を述べたいのは、これらの人々に対してである。

コミュニケーションというものは、本来そのごくはじめの、あまり明確でない段階では、その内容のごく一部が紙の上に書かれるだけで、残りの、しばしばもっとも本質的な部分は、著者の心の中にかくれているものであ

る。けれど、著者はこのことに気がつかない。なぜかといえば、彼は自分の原稿を読みながら、欠けた部分を自動的に挿入してしまうからである。したがって、著者が第一に必要とするものは、彼に忠実につきそっていて、彼が自分の知っていることと書いたことをはっきり区別していないのを指摘し、彼の激したそしてしばしば敵意にみちた反応を耐えてくれるようなだれかである。私にしてみれば、書くというのは気まぐれでできることではない。書いているときには、他のことはすべてとまっている。ということは、だれか他の人が重荷を負ってくれればならぬことを意味している。私の第一の謝辞は、いつものとおり、私の妻、ミルドレッド・リード・ホールに捧げられる。彼女は研究のパートナーでもあり、研究の途上さまざまな面で私を助けてくれたので、彼女の貢献と私のそれとを分けることはちょっと困難である。

私の研究を経済的に支持してくれたのは、国立精神衛生研究所（National Institute of Mental Health）からの研究費である。ヴェンナー＝グレン人類学研究基金と人間生態学基金は、フィールドへの旅行に不可欠な援助と支持を与えてくれたし、また原稿の準備のための莫大な出費を支弁するのを助けてくれた。

私はかのユニークな機関であるワシントン・スクール・オヴ・サイカイアトリーの理事会とその教授団・職員一同にとくに一言お礼を申述べておきたい。長年この機関のリサーチ・フェローとして、また教授団の一員として、私はこの創造的なグループと交流しあうことから得るところ多大であった。ワシントン・スクールは私の研究のスポンサーになってくれ、研究を進める刺激を与え、また暖く受けいれてくれる雰囲気を作ってくれたのである。

次に名をあげる編集者の人たちは、この本の原稿作製の上で私を助けてくれた。コロラド・ボウルダー社のロマ・マクニクル、ダブルデイ社のリチャード・ウンズロウとアンドレア・バルカン、それに私の妻ミルドレッ

ド・リード・ホール。この人々の援助がなかったら、この本を書きあげることはできなかったろう。グドルン・ヒューデンならびにジュディス・ヨンカースからも、貴重で誠意に満ちた助力を受けた。この本のための線画も提供していただいた。

私は友人のバックミンスター・フラーに学問的にとくに負うところが大きい。われわれの研究はこまかいところではちがっているが、彼はいつも見通しと包括的思考のモデルの源泉であり、私はいつもそれに共鳴した。

私は私の考えかたにそれぞれユニークな貢献をしてくれ、洞察と刺激とともに貴重な精神的支持を与えてくれた三人の友人と同僚――ムフタル・アニ、ウォレン・ブローディー、フランク・ライス――に心からお礼をいいたい。

引用を許していただいた次の出版社にも、私は厚くお礼を申上げたい。――Theodore H. White の "The Making of the President 1960" の引用についてアテネウム社に、Antoine de St. Exupéry の "Flight to Arras" と "Night Flight" についてはハーコート・ブレイス・アンド・ワールド社に、Mark Twain の "Captain Stormfield's Visit to Heaven" についてはハーパー・アンド・ロウ社に、Maurice Grosser の "The Painter's Eye" についてはホルト・ラインハート・アンド・ウィンストン社に、James Gibson の "The Perception of the Visual World" についてはヒュートン・ミフリン社に、Franz Kafka の "The Trial" とユネスコ現代作品シリーズ（日本編）、川端康成の "Snow Country"（E・C・サイデンスティッカー訳）についてはアルフレッド・A・クノップ社に、Edward Sapir の "The Status of Linguistics as a Science" については Language 誌に、Benjamin Lee Whorf の "Science and Linguistics" についてはマサチューセッツ工科大学に、Benjamin Lee Whorf の "Language, Thought and Reality" についてはザ・テクノロジー・プレス社とジョン・ワイリー・アンド・サンズ社に、Ed-

mond Carpenter の "Eskimo" についてはトロント大学出版局に、Edward S. Deevey の "The Hare and the Haruspex : A Cautionary Tales" についてはイェール大学出版局 The Yale Review 誌に。

第十章に用いた材料の一部は、以前 Association for Research in Nervous and Mental Disease の紀要に掲載された私の論文 "Silent Assumption in Social Communication" に使用したものである。引用を許していただいたことに厚くお礼申上げる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

目次

日本版への序……i
まえがき……iii
第一章　コミュニケーションとしての文化……3
第二章　動物における距離の調節……13
動物におけるスペーシングの機構（逃走距離・臨界距離・接触性動物と非接触性動物・個体距離・社会距離）／人口調節／トゲウオの連鎖／マルサスの再検討／ジェームズ島での大量死／捕食と人口
第三章　動物における混みあいと社会行動……37
カルフーンの実験（実験のデザイン・シンクの発達・求愛とセックス・巣づくり・子の保育・なわばりと社会組織・シンクの生理的結果・攻撃行動・軽度のシンク・カルフーンの実験の要約）／混みあいの生化学（外分泌学・糖尿病モデル・制御とストレス・ストレスの効用）
第四章　空間の知覚——遠距離受容器　目・耳・鼻……62
視覚空間と聴覚空間／嗅覚空間（嗅覚の化学的基礎・人間の嗅覚）

第五章　空間の知覚——近接受容器　皮膚と筋肉……76
オフィスにおけるかくれたゾーン／温度空間／触覚的空間
第六章　視覚的空間……95
総合としての視覚／見える機構／立体視
第七章　知覚への手掛りとしての美術……111
現代の諸文化の対照／知覚の歴史としての美術
第八章　空間のことば……130
知覚への鍵としての文学
第九章　空間の人類学——組織化のモデル……145
固定相空間／半固定相空間／非公式空間
第十章　人間における距離……160
空間の力動性／密接距離／個体距離／社会距離／公衆距離／距離はなぜ「四つ」か？
第十一章　通文化的関連におけるプロクセミックス……182
——ドイツ人・イギリス人・フランス人
ドイツ人（ドイツ人と侵害・「プライベートな圏」・空間の秩序）／イギリス人（電話の用い方・隣人・寝室は誰の部屋か・話し声の大小・目の行動）／フランス人（家庭と家族・開いた空間のフランス的使用・星型と格子型）

第十二章　通文化的関連におけるプロクセミックス……206
——日本とアラブ圏
日本（混んでいるというのはどの程度からか・日本人の空間観念、「間」を含む空間）／アラブの世界（公共の場での行動・プライバシーの観念・アラブ人の個体距離・向いあうこと、あわないこと・インヴォルヴメント・囲みこまれた空間についての感情・境界）
第十三章　都市と文化……228
制御の必要／心理学と建築／病理学と過密人口／単一時的時間および多元時的時間／自動車症候群／包括的共同体建築／未来の都市計画の趣意書
第十四章　プロクセミックスと人間の未来……249
形対機能、内容対構造／人間の生物学的な過去／解答の必要／文化をぬぎすてることはできない
付録　遠近法の一三のヴァラエティーに関するジェームズ・ギブスンの論文の摘要……261
訳者あとがき……269
文　献……1

かくれた次元

第一章　コミュニケーションとしての文化

この本の中心的なテーマは、社会的・個人的空間と、人間によるその知覚との問題である。文化の一つの特殊化した作品として人間の空間利用の問題についての観察と学説のために、私はプロクセミックス（proxemics）という語をつくった。

この本で展開される概念は、私の発案にかかるものではない。五三年以上も前に、フランツ・ボアズ（Franz Boas）が、コミュニケーションとは、文化いやじつに生活それ自体の核であるという見解の基礎をうちたてた。この考えかたには、私も賛成である。その後二〇年を経て、インド・ヨーロッパ語をしゃべるボアズと他の二人の人類学者、すなわちエドワード・サピア（Edward Sapir）とレオナード・ブルームフィールド（Leonard Bloomfield）たちは、アメリカ・インディアンとエスキモーたちのまるきりちがう言語に対面することとなった。これら二つの異なる言語体系の間の矛盾は、言語そのものの本質にかかわる一つの革命を生みだした。それ以前には、ヨーロッパの学者たちは、インド・

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo